

「倫敦塔」考察

——牢獄的世界をめぐって——

夏目漱石作「倫敦塔」は、明治三十八年（一九〇五年）一月の「帝國文学」（第百二十一号）にのり、のち「漾虚集」（明治三九年五月大倉書店刊）に、「カーライル博物館」「幻影の盾」「琴のそら音」「一夜」「薔露行」「趣味の遺伝」などと共に収まっているものである。

この作品にあらわれたロンドン塔は、いうまでもなく、ロンドンの東部、テームス河の北岸にある一群の建物であり、敷地は面積約十三エーカーで不正五角形をなしている。現存の主要建築は十一世紀末、一〇九〇年に造営され、ウイリアム一世以来、ジェームス一世まで五百年間国王の居城となったが、増築された多くの塔は、牢獄および処刑場として使用された。

漱石が、このロンドン塔を見物したのは、かれの英国留学中のことであつた。したがって、この作品は、漱石のロンドン塔見物の事実の報告、たんなる見物記かとみる者もあるかも知れないが、小説

したがってこれより、どの程度に漱石が想像性を駆使して、虚構幻想をこの作品にもちこんでいるかを、漱石の日記・書簡などと比較しながら辿ってみたい。

漱石が、イギリス留学のため横浜を出帆したのは、明治三十三年（一九〇〇年）九月八日のことであり、ゼノア・パリーを経由し、ロンドンに着いたのは、同年十月二十八日のことであつたが、ロンドン着後間もなく、漱石はロンドン塔を見物している。漱石の日記によれば、

十月三十一日 Tower Bridge, London Bridge, Tower Monument ヲ見ル……とある。ロンドンへ着いて四日目のことである。そしてそれ以後、漱石がロンドン塔を見物した記事はない。漱石が「倫敦塔」の作品のなかで、「二年の留学中只一度倫敦塔を見物した事がある。」「行つたのは着後間もないうちの事である」と記しているのは、事実そのままである。

だが、「無論汽車へは乗らない」と書いたとき、いくらか漱石の虚構がはいりかけてくる。汽車へは乗らないと書いているが、事実としては、明治三十三年十一月一日、二日汽車に乗っている。^{（注1）}

事実としては、汽車に乗ったこともある漱石だったが、この作品のなかでは、ロンドンの乗り物にとりのこされたような「余」が必要だったのである。

「倫敦塔」で、汽車は勿論のこと、馬車にも電気鉄道・鋼条鉄道にも取りのこされ、孤立している「余」を創出したのは、これはあ

岡 林 清 水

である。漱石にロンドン塔を見物したという事実はあるが、この作品は、この事実の上につくりあげられたフィクションである。

漱石自身「倫敦塔」の終りで、あとがきを添え、「この篇は事実らしく書き流してあるが、実のところ過半想像的の文字であるから、見る人は其心で読まれん事を希望する……」と述べている。

さらに、このあとがきを続けて読んで行けばあきらかだが、漱石は、漱石自身のロンドン塔見物の体験の上に、ロンドン塔に関するいくつかの文献や、歴史的事実、或は絵画などを参考としながら、漱石の想像をたくましくして、ここに「倫敦塔」をつくりあげたことになっている。

つまり、「倫敦塔」は、漱石の体験および歴史的事実・文献的資料の上に、想像性を駆使してつくりあげられている虚構幻想の世界である。「倫敦塔」の「真実」は、この事実性と幻想性・虚構性との上にまたがっているものである。

くまで、後に出てくる「馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。」に対応するためであつた。

ロンドンの現実から孤立し、馬、車、汽車の中にとりのこされたロンドン塔が、同じくロンドンの社会から孤立化している「余」と一つとなり、「余」は目に見えぬ長い手でぐいぐいと牽きつけられ、塔門まで馳せ着けるのである。

この門をはいるとき、ダンテの「神曲」の句を思うのだが、これについては、明治三十八年一月二十日付の皆川正禧宛の書簡で、漱石は「故意とらしい」「少し気ざ」と反省をしているが、それだけにかなり意を使つたらしく、はじめ「帝國文学」（明治三十八年一月）にのせたものは、

憂の国に行かんとするものは此門を潜れ。永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威われを作る。

最上智、最初愛。我が前に物なし只無窮あり、我は無窮に忍ぶものなり。

（傍線岡林）

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。となつてゐるのに、のち「漾虚集」（明治三十九年五月大倉書店刊）では、右の傍線の箇所が、

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我前に物なし、只無窮あり、我は無窮に忍ぶものなり。
となっている。

漱石がいかにか「神曲」の句の訳出に意を用いているかをうかがうことができるのだが、この訳語のいずれをとるにしても、漱石がこの「神曲」地獄篇の句を取り出すことによって、地獄的な幽暗のロンドン塔を幻想的に現出させようとする創作的意図は明白である。

漱石の意図したロンドン塔の幻想的幽暗は、三羽しか見えぬ鴉を五羽居ると断言する怪しい女の登場するにおよんで、さらにその幻想性を増してくるのだが、このとき、「文学論」で述べている超自然的Fが漱石の意識にのぼっていることは、当然考えてよいであろう。

同じく「漾虚集」にのっている「薙露行^{かいろこう}」では、シャロットの塔に住むシャロットの妖女を登場させることによって、幻想的雰囲気をかもし出しているが、この「倫敦塔」でも、塔のほとりに怪しい女を出現させ、幻想的雰囲気を形成しながらそのなかへ、「宿世の夢の焼点」のようなロンドン塔を浮びあがらせたのであり、この場面設定の上に描き出されたポーシャン塔の悲惨の歴史は、冥府からの幽光の如き効果をあげている。

この幽光のなかで漱石は、「牢獄」について考え、「使える身体は眼に見えぬ縄で縛られて動きのとれぬ程の苦しみはない」といい、自由を奪われた人間の苦痛についてふれるとともに、牢獄の壁に文字を残した人々をおもい、「この壁の周囲をかく迄に塗抹した

的狀況は、かつて自由民権運動の闘士たちが体験した牢獄のなかでの獄中文学とか、牢獄の意識の底から生み出した自由憧憬の文学を支える、浪漫的自由の情熱にも通じるものであった。

漱石が「倫敦塔」を書く際に、「リチャード三世」と共に大いに参考にしたという、エインズウォースの「ロンドン塔」も、すでに自由新聞がとりあげているものであった。明治十六年（一八八三年）七月十二日の自由新聞に、「倫敦塔記」がのりはじめたのだが、この紹介文で、「又た別ニ此塔ニ関スル事蹟ヲ稗史体ノ文ニ綴リ成シタル面白キ書ヲ得タレバ此ノ記文ヲ訳シ出シ畢リタル後更ニ訳ス可シ……」とのべている。

ここでいう、「此塔ニ関スル事蹟ヲ稗史体ノ文ニ綴リ成シタル面白キ書」とは、エインズウォース William Harrison Cinsworth (1805—1882) の長編小説「ロンドン塔」のことであり、明治十六年六月、自由党党首板垣退助が欧洲土産としてわが国へもたらしたものであった。

のち、「龍動塔話^{りゅうどうた}」（欧米政理叢談・明治一六年一〇月—一六年一二月、宮崎夢柳訳）となって、四回にわたり掲載されているが、これは、エインズウォースの「ロンドン塔」の第一篇第一章の約四分の三程度を紹介したものであった。

漱石が当時、どの程度に自由新聞や欧米政理叢談を読んでいたかは明確でないし、漱石の「倫敦塔」のあとがきにも、「龍動塔話」については何もふれていないが、漱石の作品に付せられた序文・あ

人々は皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。……居ても起ってもたまらなく為った時、始めて釘の折や鋭き爪を利用して無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩らし、平地の上に波瀾を画いたものであらう。彼等が題せる一字一画は、号泣、涕淚、その他凡て自然の許す限りの排悶的手段を尽したる後猶飽く事を知らざる本能の要求に余儀なくせられたる結果であらう。」と述べている。

自由を奪われた牢獄のなかで、死と対決しながら、壁に物を書きしるす人間の極限の状況に、漱石は言及しているのだが、この極限状況は、実は漱石の心をもっとも強烈にとらえたものとみてよからう。

漱石が「倫敦塔」を書く際に参考にした「リチャード三世」も、生の極限的状況を描いている点で漱石の心をとらえたものであり、その第四幕第三場の Their lips were four red roses on a stalk, なども、漱石は「倫敦塔」で、「絞める時、花の様な唇がびりびりと顫うた」と表現している。花の唇が「びりびりと顫うた」というが如き、感覚的表現・極限的状況把握が漱石において、とりあげられているのである。

明治三十九年十月二十六日付の鈴木三重吉宛ての書簡で「死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやって見たい。」と、漱石がのべているのも、人間の極限状況から生まれる文学におもい至ったことであつた。

ここで漱石は、維新の志士の精神に言及しているのだが、この心

とがきの類は、必ずしもその作品発想の過程を十分に伝えるものでないことは、「薙露行」の序文を通してみても、うかがえることである。（参照・拙稿「薙露行」研究・高知大学教育学部研究報告第一号・昭和二六年四月発行、「薙露行」の超自然的F・国文学攷・昭和三五年五月発行）

じきじき自由新聞や欧米政理叢談を読んでいたとしても、漱石は宮崎夢柳訳の「龍動塔話」のことを、多分知っていたと思われる。漱石が「倫敦塔」執筆に至るまでの過程において、夢柳訳の「龍動塔話」のことなどが潜在意識下にあったのではあるまいかと考えられるのである。

「倫敦塔」にみられる漱石の牢獄への関心と、牢獄下においての自由への憧憬の念とは、自由民権運動文学にみられる牢獄意識・自由への憧憬と、みえない糸で結ばれている点是否定できない。

「倫敦塔」執筆のころの漱石には、すでに社会と自己との断層が明確に意識され、牢獄的世界が形成されていたといえよう。

夏目直克の五男として、慶応三年（一八六七年）、江戸牛込馬場下に生まれた金之助（漱石）は、生後間もなく里子に出され、四谷の古道具屋のおはちいれの中で眠っていたのを、通り合せた彼の姉が見て、可哀そうになり、家につれかえったが、乳ほしさに彼は一晚中泣き明かし、再び、乳離れのするまで古道具屋に預けておかれた（夏目鏡子「漱石の思ひ出」）という、家庭的に至って不遇な、漱石年譜のはじまりは、すでにこのとき、漱石の自我的性格を

方向づけていたといってもよい。

そして、明治三十三年九月から明治三十六年一月に至る二カ年間の英国留学中に、漱石は、自己の生活がどうしても協和し得ない周囲の風俗・習慣・趣味や、自己の血肉となり切らない英国の、ひいては西洋の、言語・文芸をはっきり認識するに至り、遂に「自己本位」の四字に目覚め、いよいよ漱石の自我的性格は明確になって行った。

だが、漱石は、「自己本位」覚醒の代償として、周囲一般から「神経衰弱兼狂気」と目されたのである。漱石のロンドンでの下宿生活は、陰鬱といわねばなるまい。漱石は胃も弱かった。明治三十三年九月八日横浜出帆後の漱石の日記をみて、たびたび下痢し、「甚だ不愉快」の状態がつづいている。

帰朝後も、この精神的・肉体的不愉快な状態は続いた。このような状態のなかで、自我的性格が強くなればなるだけ、勢い、自己と社会・人格と環境・精神貴族対俗物の問題が、絶えず漱石の心を領し、二元的相剋・葛藤がはげしく彼をせめつけた。

しかも、明治三十年代後半は、重工業の発達につれて資本主義のいちじるしく躍進する中に、社会的矛盾がいよいよ露骨になってきた時代であり、若い人たちが深い苦悶と懷疑におちいった時代であった。この時代の中で漱石の牢獄の世界が形成され、後の「道草」に書かれたような、いやそれよりもなおひどい、陰鬱・不愉快な漱石の日々がつづいた。

この場面は、シェークスピアの「リチャード三世」第四幕第一場から借りてきたにもかかわらず、四人の女性の登場となっている原作を改変して漱石は、エリザベスただ一人、黒い喪服を着た女として登場させているのである。このあたりに漱石の意図した孤独の黒がとくに目をひくのである。さめざめと泣く女の声の韻をのこして舞台が変れば、さらにそこに黒装束の影が一つあらわれる。鳥の黒い嘴も、いよいよ暗い雰囲気をつくりあげる。

ところどころにみられる白い色も、黒を鮮烈にうきざりするためとみられるものばかりである。克蘭マーは白き髻を胸まで垂れ、二王子の手は極めて白い。白い斧の刃、真白な頸筋等、皆黒と交錯して、黒い運命を幽先のなかに浮びあがらせるのである。

赤い色もまた同じく、黒い色をいやが上にも浮びあがらせるのである。屠れる犬の生血とは、牢獄から眺めた冬の日の形容だが、陰惨な、どす黒い赤さがしみこんだようである。牢獄の壁を撫でた指先は真赤に染まり、壁からたれる露の滴りは床の上にあざやかな紅の紋を連ねるが、この幻想的な中にうかぶ血の色は、黒い牢獄の壁を背景としてどす黒い赤さをにじみ出す。

「倫敦塔」にみられる色彩には、漱石内部のどす黒い深淵がにじみ出ているといえよう。とはいっても、漱石が「倫敦塔」を意図的に暗く浮びあがらせんがために、いささか逆上気味につくりあげようとした点も、認めざるを得ない。だが、その技術的虚構性とはともかくとして、この「倫敦塔」の根底にあるものは、漱石内部の牢

このような日々のなかで、漱石のなかにおける牢獄的世界と、陰鬱な閉じこめられたようなロンドンでの下宿生活と、多くの人を閉じこめた悲惨な歴史をはらむロンドン塔とは、イメージとしてかさなりながら、ロンドン塔見物後四年を経た漱石の脳裏に、幽光のごとく浮んできたものと思われる。

この漱石によってつくりあげられた「倫敦塔」は、自由民権運動文学に通ずるような牢獄の世界が基盤となっているといえよう。

江藤淳氏が「夏目漱石論」で指摘している如く、明治三十年代後半の夏目漱石文学において、笑いの文学とロマンティックな文学がほぼ並行して書かれた事実に対して、必要以上の意義を幻想し、そこに漱石の精神が平衡を求めたとか、あるいは漱石の苦悩が狂気に至るのを防ぐ安全弁であったなどと解するのは、小宮豊隆氏をはじめ漱石文学研究者の多くの人たちの一致した見解であるが、「倫敦塔」「薔露行」などの浪漫的作品は、どうも平衡状態の漱石によって発想されたものではなく、牢獄的・極限的精神状況の基盤の上に生まれたものである。

「倫敦塔」にみられる色彩の面に目をうつすと、黒が基調として用いられているようで、ここにも、この作品の牢獄的暗い基盤が表われている。黒鉄の冑・星黒き夜・黒霧の奥・黒き塔の影と、いたるところに黒があらわれる。また登場人物もすべて、黒い衣裳をつけている。克蘭マーは黒の法衣を纏い、二人の王子は黒き上衣を着、エリザベスは黒い喪服を着て二王子に会いに来る。しかも、

獄的世界であり、この作品の浪漫性も、この上につくりあげられたものであった。

したがって「倫敦塔」は、漱石にとって、英国留学中の幽暗のなかから浮びあがる思い出の塔であるとともに、明治三十年代後半の漱石の牢獄的状况を反映した牢獄塔であり、自由民権運動文学の基盤とつながるものを有する浪漫的作品としての記念塔でもあったのである。

注1 十一月一日十二時四十分ノ汽車ニテ Cambridge ニ

至リ Andrews 氏ヲ訪フ同大学ノ様子ヲ知ランガ為ナ
リ二時着……Andrews 氏宿所ニ泊ス

十一月二日 田島氏ノ案内ニテ Cambridge ヲ遊覧ス
四時 Andrews 氏方ニテ茶ヲ喫ス田島氏方ニ至リ分袂
ス 7・45 ノ汽車ニテ倫敦ニ帰ル

注2 漱石の「文学論」第一編第三章文学的内容の分類及び其
価値的等級今文学的内容たり得べき一切のもの、換言すれ
ば(F+T)の形式に改め得べきものを分類すれば、

(一)感覚F、(二)人事F、(三)超自然F、(四)知識F

の四種となるべく、……余の所謂超自然的材料中には単に
宗教的、信仰的材料を含むのみならず、凡ての超自然的元
素即ち自然の法則に反するもの、若しくは自然の法則にて
解釈し能はざるものを含めばなり。……而して此種の超自

然的現象が一般に強烈の情緒を引き起すに足ることは、開明の今日、是等が立派に文学的内容として存在するによりても明日なりとす。……

注3 明治三十八年一月二十日 皆川正禧宛 漱石書簡

倫敦塔の御批評難有候実は稿を草する折は多少逆上の氣味にて自分でも面白いと思候処脱稿の上通読したらいやな処が多く且今一いきと云ふ所で氣が抜けて居る様で我ながらいやに成つて居たのです。……君の端書が来たものだから当人大得意で以前の逆上に戻りさうに成つて来ました。ダシテの句は仰せの如く故意とらしく候。あれはあまり句が長すぎる為もあります。何だか知つて居る事を氣取つて無理に挿入した様な感じがある。少し氣ざと思ふ。……(傍線・岡林)

注4 参照・拙著「自由民権運動文学の研究」昭和四八年三月発行

自由民権運動文学というのは、明治七年から明治二十三年にいたるわが国近代の変革期に、自由民権運動のなかで、自由民権運動家たちによって創作された文学作品・文学的活動を包括するものである。(二四ページ)自由民権運動文学は、獄中あるいは獄中の状況下において、主体性の「解放と憧憬」をめざして発想された変通の文学ということができるし、その面から自由民権運動文学の浪漫性を

指摘することもできよう。(五二ページ)

(高知大学教育学部教授)